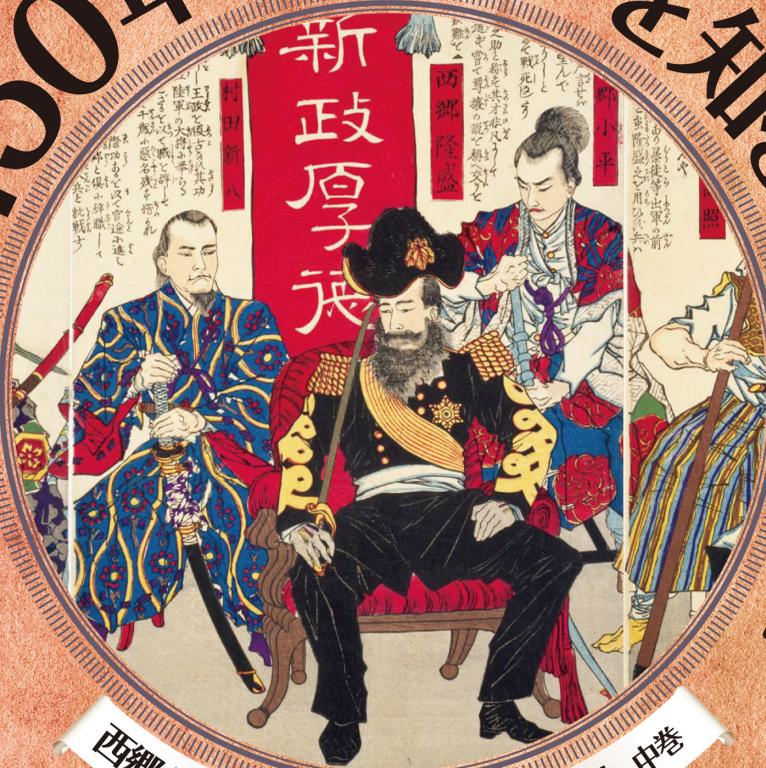


明治150年光の歩みを知ろう、つなぐ前編



西郷どん、大久保卿、薩摩藩年表帖 中巻

政治、施政、士族の乱、西南戦争、軍国、
国際問題、事件などが時系列でわかる!

王政復古、太政官制、府藩県三治制、
公議所設置、東京遷都、上下議院開設、
版籍奉還、旗本領上知、藩制改革、
工部省設置、上知令、壬申戸籍、貨幣法、
廢藩置県、明治中央集権国家誕生、
府県官制、府県統合、壬申地券、
太陽暦を採用、地租改正、征韓論争、
明治六年十月の政変、内務省設置、
民権運動、憲法起草の詔、減租の勅諭、
東京大学創立

祭政一致ノ制、神仏分離令、
切支丹・邪宗門禁制、鹿伏毀釈、
祭政一致の詔、文部教部両省合併、
キリスト教禁止高札撤廃、大教院閉鎖、
信教の自由保障の口達

戊辰戦争、江戸城開城、江戸鎮台設置、
政府の兵制統一、御親兵設置、
陸海軍両省設置、近衛兵創設、徴兵令、
秩祿処分、士族の乱、西南戦争

神戸事件、堺事件、政府高官暗殺等事件、
粟田口止刑事件、二卿事件、
琉球漂流民殺害事件、マリア・ルス号事件、
琉球処分、小野組転籍事件、
江華島事件、台湾征討

関所廃止、大阪開港、改元ノ詔、東京開市、
鉄道敷設朝議、散髪脱刀令、
岩倉欧米使節団、田畑売買禁止令廃止、
学制發布、国立銀行条例、万博参加、
京都・大阪・神戸の鉄道全通

目次

はじめに……………	2
目次年表……………	3~19
明治150年その歩みを知る、つなぐ(前編) 西郷どん・大久保利通・薩摩藩年表帖中巻……………	20~404
鳥羽・伏見方面戦闘図……………	27
西南戦争九州地点図……………	338
主な参考文献……………	405~409
あとがき、奥付……………	416

はじめに~この本の使い方~

この本(中巻)は、慶応3年(1868)12月、徳川慶喜が京都を去り、明治新政権の樹立から「太政官制」、「版籍奉還」、「廃藩置県」、「岩倉欧米使節団」、「明治六年の政変」、「西南戦争」などまでを取扱っております。

明治とは、どんな時代だったのかの前編としています。

この激動の時代、西郷隆盛、大久保利通をどうしていたのか、薩摩藩主、藩士の事歴、そして薩摩藩は如何に動いたのか、そして朝廷は、官吏となった諸藩の勤王志士はと、その動静を編年年譜で追っています。

鹿児島出身の士は、西郷軍、政府軍・警視隊、その他、この期に活躍した人々など、判明範囲で多く掲載しました。薩摩藩年表帖中巻です。

既刊の「戊辰戦争年表帖」、長州藩中心の『維新年表帖』(下巻)と合わせ御覧頂ければ、西南雄藩、徳川幕府等の動静等、その背景も垣間見えるものと思います。

一部を除き日付までを記載しています。なお、不明な月・日付に関しては「一」で割愛、または「夏」「頃」などと表記している箇所もございます。ご了承下さい。特に重要と思われる事項(歴史的流れのために必要と思われる事件等)は、太字で記載しております。

本体となる「明治150年その歩みを知る、つなぐ(前編)」(西郷どん・大久保利通・薩摩藩年表帖中巻)は395頁とそこそこの分量となっております。目次年表は、この期間を17頁に圧縮しており、その項目の掲載番号が記載されております。索引の一助となれば幸いです。

西暦 和暦	旧暦 【新暦】	出来事	No.
1868 (慶応3)	12月11日 【1月5日】	■新政府に恭順の意思を示すために、徳川慶喜、二条城西門を出て大坂城に向かう。	2601
	12月12日 【1月6日】	■新政府参与職が決まる。	2604
	12月14日 【1月8日】	■新政府、「王政復古」を諸藩に布告。	2609
	12月25日 【1月19日】	■江戸三田の薩摩藩邸(上屋敷)、隣接の佐土原藩(薩摩支藩)邸、旧幕府に焼き討ちされる。	2628
	12月26日 【1月20日】	■小御所・三職会議、徳川慶喜の「辞官納地」を正式決定。	2629
	12月27日 【1月21日】	■三田尻を出港した三条実美ら五卿、4年ぶりに帰京、薩摩藩浄福寺隊に守られて参内。	2630
	12月30日 【1月24日】	■西郷吉之助(隆盛)ら、江戸薩摩屋敷焼打ちの報を受ける。	2637
1868 (慶応4・明 治1)	1月3日 【1月27日】	■「戊辰戦争一鳥羽・伏見の戦い」はじまる。	2645
	1月4日 【1月28日】	■「戊辰戦争一鳥羽・伏見の戦い—官軍の出現、幕府軍、朝敵となる」。	2651
	1月6日 【1月30日】	■大坂城の徳川慶喜、自ら出陣を宣言。が、敗北を悟った徳川慶喜は、夜中に大坂城を脱出、一旦、米国艦「イロクオイ号」に逃げ込む。	2654
	1月7日 【1月31日】	■「鳥羽・伏見の戦い」、ほぼ終息するも、伏見・淀の大半が焼亡。	2657
	1月8日 【2月1日】	■徳川慶喜らを乗せた「開陽」、大坂沖を江戸に向けて出帆。	2660
	1月9日 【2月2日】	■明治天皇14才で即位、第122代。 ■「三職制の新政府、副総裁設置」。	2666
	1月10日 【2月3日】	■「王政復古ノ詔」。 ■「外国交際ノ詔」。 ■朝廷、徳川慶喜・松平容保・松平定敬ら佐幕派藩主、旧幕吏ら27名の官位を褫奪し、慶喜を征討するの令を京都三条及び荒神口の二方面に掲示。そして京屋敷を没収。	2669
	1月11日 【2月4日】	■「神戸事件」起こる(明治最初の外交問題)。	2671
	1月14日 【2月7日】	■新政府、天領を没収する旨の布告を発する。 ■「年貢半減令」。旧幕府領の年貢半減の沙汰。	2686
	1月15日 【2月8日】	■「神戸事件」。新政府、「王政復古」を各国公使に宣言。同日、外国交際を万国公法により行う旨を布告。	2688
	1月15日 【2月8日】	■「徳川慶喜政権返上内外政事親裁ノ國書」。徳川慶喜政権返上の請を允し内外政事御親裁の国書。	2689
1月17日 【2月10日】	■「三職分課職制ヲ定ム」「三職分課職員ヲ定ム」。新政府、第一次の官制を発布。三職七科(1868年1月17日設置~2月3日八局に改正)。	2698	

西暦 和暦	旧暦 【新暦】	出来事	No.
1868 (慶応4・明 治1)	1月17日 【2月10日】	■大久保利通、総裁有栖川宮熾仁親王に、天皇の「大坂行幸」を進言。	2699
	1月20日 【2月13日】	■新政府、幕府締結の条約遵守を各国に通告。	2706
	1月21日 【2月14日】	■新政府外国事務総督・東久世通禧、徳川慶喜征討を理由として、各国代表に局外中立を要請。	2710
	1月25日 【2月18日】	■仏国発議で、英米仏蘭伊普6ヶ国が、日本内戦に対し局外中立を布告。	2723
	1月27日 【2月20日】	■新政府、「年貢半減令」を口達撤回。赤報隊は進軍し偽官軍とされていく。	2728
	2月3日 【2月26日】	■天皇、二条城太政官代に行幸、「徳川慶喜に対たいする親征の头号令」を発す。 ■「総裁局ヲ置ク」「三職八局職制並ニ職員ヲ定ム」。新政府、三職七科制を改め、「総裁局」を新設、「三職八局の制」とする。	2745
	2月6日 【2月28日】	■征討軍が再編成され、それまでの東海道・東山道・北陸道鎮撫総督は、「先鋒総督兼鎮撫使」に改称された。	2750
	2月9日 【3月2日】	■「総裁熾仁親王へ勅語」。征東大総督軍事委任。 ■東征大総督府設置で、諸道(東海道・東山道・北陸道)先鋒総督兼鎮撫使がその配下となる。	2757
	2月11日 【3月4日】	■新政府、諸藩を大・中・小の3区分する。 大藩は40万石以上、中藩は10万石以上、小藩は1万石以上とする。 ■新政府、「徴士・貢士の制」を定め、貢士を「下ノ議事所」の議事官とする。	2763
	2月12日 【3月5日】	■西郷吉之助(隆盛)、薩摩藩東海道先鋒隊差引(司令官)となり、京を出発、駿府に向かう。独断ともいう。	2766
	2月12日 【3月5日】	■徳川慶喜、江戸城を出て上野寛永寺(大慈院)へ移り、謹慎の意を表す。	2767
	2月15日 【3月8日】	■明治第二の国際紛争事件「堺事件」勃発。	2775
	2月15日 【3月8日】	■「熾仁親王征東大総督御委任ノ詔」。 今般征東軍務委任ノ間速ニ可奏掃攘ノ功事。 □東征大総督・有栖川宮熾仁親王、御所御学問所で明治天皇に謁見、節刀と錦旗を賜り、京都を出軍。	2776
	2月16日 【3月9日】	■「徳川家存続が総裁局で決まる」。	2779
	2月23日 【3月16日】	■『太政官日誌』創刊。	2795
	2月25日 【3月18日】	■東征大総督府下参謀・西郷吉之助(隆盛)、東海道先鋒軍の各藩隊長を静岡に集め、江戸進軍の命を伝える。	2800
	2月28日 【3月21日】	■明治天皇、二条城太政官代に行幸し、討幕の為の「徳川幕府御親征ノ詔」を発布。	2809

西暦 和暦	旧暦 【新暦】	出来事	No.
	3月6日 【3月29日】	■駿府の大総督府、東海・東山両軍に、3月15日江戸城総攻撃を決める。	2831
	3月9日 【4月1日】	■東征大総督府下参謀・西郷吉之助(隆盛)、駿府で精鋭隊歩兵頭・山岡鉄舟(鉄太郎)と会見し、恭順降伏の条件(徳川処分案七ヶ条)を示す。 鉄舟は、旧幕府軍事取扱・勝義邦(海舟)の和平解決の書面を提示。	2837
	3月13日 【4月5日】	■「祭政一致ノ制ニ復シ天下ノ諸神社ヲ神祇官ニ属ス」。宗教関連の布告令の最初であった。	2846
	3月13日 【4月5日】	■東征大総督府下参謀・西郷吉之助(隆盛)、江戸高輪南町の薩摩藩下屋敷に到着。旧幕府軍事取扱・勝義邦(海舟)、正午に薩摩藩邸の西郷を訪問。 静寛院宮・天璋院(篤姫)の身辺保護を話し合う。 西郷は、静寛院宮(和宮)を人質にしない事を明言。	2848
	3月14日 【4月6日】	■「御誓文」いわゆる「五箇条ノ御誓文」。	2849
	3月14日 【4月6日】	■「江戸城無血開城の交渉が成立」。江戸田町薩摩藩蔵屋敷(橋本屋)で西郷吉之助(隆盛)、勝義邦(海舟)と再度会談、勝は徳川処分案を提示。	2851
	3月15日 【4月7日】	■新政府、天皇行幸を布告。 ■「天下ニ令シ幕府旧来ノ榜掲ヲ撤シ新ニ定三札覚五札ヲ揭示セシム」。	2852
	3月17日 【4月9日】	■「諸国大小の神社において別当あるいは社僧が復飾することを命じる」(復飾令)。神主を兼帯していた僧侶に対して還俗する旨の通達である。 「このたびの王政復古の方針は悪い習慣を一掃することにあるので、全国各地大小の神社のなかで、僧の姿のまま別当あるいは社僧などと唱えて神社の儀式を行っている僧侶に対しては復飾(還俗)を仰せつける」。 □神仏分離令(正式には神仏判然令)が出される。	2858
	3月20日 【4月12日】	■「朝議は大総督宮稟議の徳川家処分案大綱を容れることに決する」。	2865
	3月22日 【4月14日】	■明治天皇、大坂行在所となった津村御坊(のちの本願寺津村別院)に到着、6週間余り滞在する。	2870
	4月3日 【4月25日】	■流山陣屋を包囲された新選組近藤勇、「大久保大和」の名を語り、香川敬三軍軍監・有馬藤太(薩摩藩)に投降し、越谷の総督軍本陣に連行される。	2898
	4月4日 【4月26日】	■東海道先鋒総督橋本実梁らが、勅使として江戸城に乗り込んだ。 東征大総督府下参謀・西郷吉之助(隆盛)らが付き従った。	2899
	4月7日 【4月29日】	■諸侯、江戸を引払う。	2905
	4月11日 【5月3日】	■「戊辰戦争一慶応4年(1868)年1月3日~明治2年(1869)5月18日一江戸城、無血開城」。 ■勅書を受けた徳川慶喜、解官され、未明、寛永寺大慈院を出て水戸へ向かう。	2911
	4月21日 【5月13日】	■東征大総督・有栖川宮熾仁親王、諸道先鋒総督を従えて江戸入城。 荘厳なる入城式。そして、江戸城を大総督府とすると宣言。	2938

西暦1877

明治10	2月6日	<p>■明治天皇、療病院および癲狂院へ金2,500円、25円をそれぞれに下賜。</p> <p>■宮内省出仕木戸孝允、右大臣岩倉具視宛に書簡を送る。 □「肥後・佐賀・筑前・土佐・備前・因州・彦根・桑名・会津・庄内ナトハ必饗応難図、其内証跡ヲ得候モノモ御坐候。何卒及一變動候上ハ於東京煽動候モノハ一時ニ捕縛無之テハ不相成事ト奉存候」。鹿児島的情勢は、全国の士族にインパクトを与え、各地に波紋を投げかける可能性を常に有していた。</p>	5532 5533
	2月7日	<p>■捕らわれた鹿児島県加世田郷士族二等巡查・西彦四郎、同加治木郷士族四等巡查・前田素志、同帖佐郷士族同、高橋為清、同牛山郷士族同松下兼清、同平佐郷士族書生・柏田盛文の5名連名の口述書を出す。 □「自分共儀、明治九年九月以来追々警視庁へ奉職罷在り候処、同年十二月警部未廣直方始め其他、鹿児島私学校の者共容易ならざる形勢に困り、探偵方として帰省の段粗ぼ承り、同じく探偵方として帰省致度く存じ、同月二十六日川路利良の内命を受け、同県士族大山勲助へ帰省の願書差出し候処、即刻許可相成り探索等精々心を用い、且つ私学校人員入学志願の者難問いたし候様、其他の儀共は未廣等の指令に従うべき旨承知し、尤も集会に一切関係致さず候事」。 ■加世田郷士族書生・大山綱介、加世田郷士族書生・猪鹿倉保、平佐郷士族書生田中直哉ら14名も連名の口述書を出す。 ■西郷隆盛(1828~1877)、私学校に招いた鹿児島県令・大山綱良(1825~1877)に、「今般政府へ尋問の筋これあり」と上京の決意を告げる。 そして、政府への上京届や熊本鎮台への通告手続きを一任する。</p> <p>■明治天皇、一旦、京都を離れる。</p> <p>■危機感を募らせた内務卿大久保利通は、参議伊藤博文に手紙を記す。 □「誠に朝廷不幸之幸と窃に心中には笑を生候位に之有り候」。「其底位を推し候得は兼而御承知有之通之氣質故丁寧反復説論する流儀に無之、一握に方向を捻ち廻はさせ候例之方便上に出候訳に而決而無名之輕拳をやらかす趣意に無之と信用仕候」(追々話してきた通り、去年までの行きがかり上、止むにやまれぬ事になり今日のような事になったのだろう。鹿児島の拳兵は西郷の本意ではないと信じている)。</p>	5534
	2月8日	<p>■西郷軍部隊の編成が開始。出兵に際しては池上四郎(1842~1877)が募兵、篠原国幹(1837~1877)が部隊編制、桐野利秋(1838~1877)が各種軍備品の収集調達、村田新八(1836~1877)が兵器の調達整理、永山弥一郎(1838~1877)が新兵教練を担当した。 □永山は出兵に賛成しなかったが、桐野の説得で従軍を承知したという。</p> <p>■県令大山綱良、宮崎支庁長・藁谷英孝(旧延岡藩士族)(1832~1908)を呼んで西郷拳兵を伝達。 □藁谷は、西南戦争で西郷側に属して戦い、8月14日、宮崎で投降、懲役10年の刑をうけた。 ■アーネスト・サトウ(1843~1929)、この日、宮崎出張から戻ったウィリス(1837~1894)らと再会し、西郷軍拳兵のあらましを聞く。</p>	5535 5536
	2月9日	<p>■巡查たちとは別に、内務卿大久保利通が派遣した野村綱(鹿児島)(1845~1906)が、迎陽丸で鹿児島入港。11日まで留め置かれ、午後、鹿児島県庁に出頭。13日には、自白する。「大久保から鹿児島県内の偵察を依頼されてきた」。</p>	5537 5538

西暦1877

	2月9日	<p>■7日、神戸を発した、海軍大輔、海軍中将川村純義(1836~1904)、内務少輔林友幸(山口)(1823~1907)が乗船の高雄丸が、鹿児島港内大波戸台場前に投錨。西郷隆盛(1828~1877)に面会すべく、川村は、県令大山綱良と会談。西郷も面会に応じようとしたが、桐野利秋ら私学校党幹部による妨害もあり不首尾となる。 □川村は西郷隆盛の従弟で、妻・春子(1845~1930)は西郷の母の姪にあたる。西南戦争を避けるため、この日、高尾丸で鹿児島を訪問し、義父・椎原国幹(与右衛門)(1820~1899)宅で西郷隆盛と会談する予定だったが、県令大山綱良との事前の話し合いは出来たものの、泳いで高尾丸に乗船しようとする私学校徒たちに危険を感じ、船を桜島沖に退避させたため、西郷との会談は絶望的となり、鹿児島・東京を結ぶ糸は切れてしまった。</p> <p>■皇太后(英照皇太后)(1835~1897)・皇后(昭憲皇太后)(1849~1914)、女学校・女紅場・勸業場・舎密局などへ行啓。</p>	5539 5540
--	------	---	--------------



村田新八



篠原国幹



桐野利秋



永山弥一郎

明治10 2月10日

■川村純義らが乗船の高雄丸、帰途に就く。
■私学校側は、中原の「口供書」写しを県下に掲示する。

5541

■内務卿大久保利通(1830~1878)は、鹿児島県令大山綱良(1825~1877)よりの上申書を、右大臣岩倉具視に提出する。

5542

■九州派遣の少警視・綿貫吉直(元柳河藩士)(1831~1889)が率いる警部巡查700余名、東京を発つ。11日、神奈川丸で横浜出港。

□次いで少警視重信常憲(鹿児島)を長とする900名が福岡、佐賀へ、大警部上田良貞(鹿児島)(?~1883)、中警部園田安賢(鹿児島)(1850~1924)を長とする200名が福岡へ増派される。それと共に国内治安を確保するため、東北地方等から5,200名の巡查を徴募して東京の警備に当たらせ、さらに巡查4,000名を徴募して大阪に900名、京都に300名、神戸に1,800名、九州地方に5,900名を増派する。

これら総員9,500名の部隊が「警視隊」である。

□園田安賢は、嘉永3年9月1日、薩摩藩士園田右衛門の長男として生まれる。戊辰戦争には慶応4年(1868)5月から北陸征討軍に伍長として従軍し、戦傷を受けた。維新後、司法省に出仕し、一度辞職した後、明治4年(1871)10月、東京府取締組組頭となり、さらに司法省大警部となり明治7年(1874)2月に退官。徴集小隊半隊長として台湾出兵に従軍。

翌年6月、警視庁14等出仕として再度、警察官となる。明治10年(1877)4月、陸軍歩兵中尉兼警部として、西南戦争に抜刀隊巡查部隊の長として従軍し、戦傷を受けた。明治15年(1882)4月、石川県警部長に就任し、その後、石川県大書記官。警視庁二等警視兼内務少書記官に異動。明治17年(1884)4月から明治19年(1886)4月まで各国警察の状況視察のため欧米に出張し、帰国後その報告を『泰西見聞誌』として出版。以後、警視庁第三局長、滋賀県書記官、警視副総監兼第三局長などを歴任し、明治24年(1891)4月3日に警視総監に就任。明治29年(1896)6月、男爵を叙爵し、同年9月に退官。明治30年(1897)7月、貴族院男爵議員に選出され明治44年(1911)7月まで在任。明治31年(1898)1月14日、警視総監に再任され、その後、同年11月12日から明治39年(1906)12月20日まで北海道庁長官、宮中顧問官を歴任。その後、帝国国債株式会社社長、朝鮮棉花社長、共生銀行頭取を務めた。大正13年8月7日、死去。75才。

■陸軍卿山県有朋(1838~1922)、太政大臣三条実美に、作戰計画書を提出。次いで、近衛連隊、東京・大阪両鎮台に出征準備を命じる。

□通信線の構築によって「百万臨機の指令」を実現すべきだと説く。実際に政府軍は伝令や烽火、速達郵便などに加え、この有線電信を積極的に活用して、情報伝達において西郷軍(その連絡手段は主に伝令であった)に大きな優位性をとることになる。

■私学校の乱に対し、近衛及び東京・大阪両鎮台に出動命令が下る。

2月11日

■西郷隆盛(1828~1877)、鹿児島医学校校長兼病院長ウィリス家に滞在のアーネスト・サトウ(1843~1929)を訪ねる。

5543

□20人近い若者達が西郷を警護し、その言動を監視するような異常な雰囲気だったと記録されている。ウィリス(1837~1894)は、西南戦争勃発で帰国する。

■明治天皇、畝傍山の御陵に親謁。

5544

2月12日

■西郷隆盛、陸軍大将の資格で、陸軍少将桐野利秋・同僚原国幹の連名で、政府尋問のため東上すること、上京届を大山綱良県令に提出する。

5545

□「拙者共事、先般御暇の上、非役にして帰県致し居候処、今般政府へ尋問の筋有之、不日に当地発程候間、為御含、此段届出候、尤旧兵隊之者随、多数出立致候間、人民動揺不致様一層御保護及御依頼候也」。

■受理した大山綱良県令は、政府宛での届出書と関係府県、鎮台への通知文を部下に起草させる。

□「今般、陸軍大将西郷隆盛ほか二名、政府へ尋問の筋これあり。旧兵隊ら随、不日に上京の段届け出候につき、朝廷へ届の上、さらに別紙のとおり、各府県並びに各鎮台へ通知におよび候。ついではこの節に際し、人民保護上一層注意着手におよび候條、篤くその意を了知し、益々安堵致すべく、この旨布達候事。但、兇徒中原尚雄の口述あい添え候」。

■熊本鎮台司令長官陸軍少将谷干城(1837~1911)は、この日と翌日にかけて、「神風連の変」で戦死した軍人軍属の霊を慰める大招魂祭を、熊本城隣接の練兵場で挙行。

5546

□熊本鎮台の兵卒は、鹿児島、熊本、大分、福岡、長崎の出身の徴兵で、谷干城は土佐だが、参謀長榊山資紀(1837~1922)中佐、第13連隊長・与倉知実中佐(?~1877)など薩摩出身者も多く、士気を鼓舞することが必要と考えた。

■海軍大輔・中将川村純義(1836~1904)、備後糸崎(広島県三原市糸崎)に寄港、原田中秘史員を尾道に派し、京都の陸軍卿山県有朋(1838~1922)、伊藤博文(1841~1909)両参議、東京の内務卿大久保利通(1830~1878)、陸軍少将大山巖(1842~1916)、海軍少将中牟田倉之助(佐賀)(1837~1916)、大警視川路利良(1834~1879)、熊本の陸軍少将谷干城(1837~1911)らに、電報で、私学校党の反状、明白なる旨を知らせる。

5547

□西郷隆盛自身の拳兵が明確になった。



園田安賢



横浜港に凱旋した警視隊

明治10	2月13日	<p>■募兵、新兵教練が終わったこの日、大隊編制が行われ、歩兵五大隊、砲隊二大隊が決まる。</p> <p>西郷小兵衛（隆盛の末弟）(1847~1877)、松永高美(1841~1877)、辺見十郎太(1849~1877)、河野主一郎(1847~1922)、堀新次郎(1844~1877)の5名が委員となり、隊伍編成がなされ、兵卒200(城下士族30、諸郷士族170)、給養4、ラッパ役1、軍夫20、合計250名を一小隊とし、十小隊をもって一大隊とした。小隊長以下、半隊長・分隊長1名と押伍20人が各小隊におかれた。私学校党軍は、計13,000兵とされる。</p> <p>□一番大隊指揮長に篠原国幹(1837~1877)、一番小隊長が西郷小兵衛(隆盛の末弟)、次いで二番から六番。</p> <p>□二番大隊指揮長に村田新八(1836~1877)、一番小隊長が松永清之丞(1841~1877)、二番小隊長中島健彦(1843~1877)。</p> <p>□三番大隊指揮長に永山弥一郎(1838~1877)、一番小隊長が辺見十郎太、三番小隊長高城七之丞(1847~1877)ら。</p> <p>□四番大隊指揮長に桐野利秋(中村半次郎)(1838~1877)、一番小隊長が堀新次郎(1844~1877)、三番小隊長野村忍介(1846~1892)、四番小隊長川久保十次(1847~1877)、五番小隊長永山休二(盛武)(1841~1877)。</p> <p>□五番大隊指揮長に池上四郎(1842~1877)、一番小隊長には河野主一郎が選任され、桐野が総司令を兼ねる。</p> <p>□一番砲隊長は岩元平八郎恒成(1847~1877)、二番砲隊長は田代五郎。</p> <p>□淵辺群平(1840~1877)は本営附護衛隊長となり、小隊長蒲生彦四郎、種子島彦五郎の狙撃隊を率いて西郷を護衛することになった。</p> <p>□貴島清(国彦)(1843~1877)は、貴島隊指揮長。</p> <p>■右松祐永、鹿児島県第四課長心得に就任。</p> <p>■「各地方共私報電信被差止」となり、熊本県庁が電報を発する場合も「証拠トナル官印」が必要となる。</p> <p>■熊本県権令敬明(よしあき)(元小城藩士)(1822~1909)、内務卿大久保利通(1830~1878)に、「鹿児島県下状況報告」を行う。</p> <p>□大久保は、「ああ、西郷は遂に壮士の為に過られた」と深く歎息したという。</p> <p>■鹿児島属廠のスナイドル弾薬製造設備が、大阪砲兵工廠に設置される。</p> <p>■大久保利通の太政官政府に対する痛烈な批判を展開した海老原穆(鹿児島)(1830~1901)、東京で「西南戦争」私学校党に呼応しようとして逮捕される。</p> <p>□同年12月から1年間収監される。保釈され、大久保利通から親友・西郷隆盛の墓誌、伝記を記すように命を受けたという。</p> <p>明治34年(1901)6月、横浜で死去。享年73。</p> <p>■大久保利通、行在所の召により京都に向け急行する。夕刻、横浜から玄武丸に乗船。</p>	5548
	2月14日	<p>■私学校練兵場で正規大隊の閲兵式。騎乗した西郷隆盛による一番~五番大隊の閲兵である。</p> <p>■県令大山綱良は、太政大臣三条実美に宛てた届出書や府知事・県令、鎮台司令長官に宛てた通知文を持たせた専使を、この日、出発させる。しかし、各地でことごとく捕縛される。</p>	5552

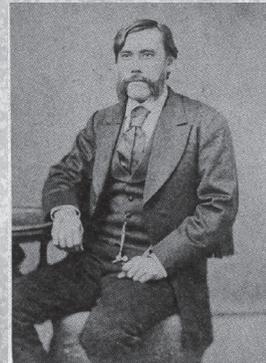
	2月14日	<p>■陸軍卿山県有朋中将、熊本鎮台司令長官陸軍少将・谷干城の報告に答え、攻守いずれの戦略に出るも谷干城に一任し、ただ熊本城の死守を厳命する。</p> <p>■谷干城(1837~1911)、夕刻から作戦会議。小倉から参じた第14連隊長心得・乃木希典(1849~1912)少佐も軍議に臨む。守城に決まる。</p> <p>■明治天皇(1852~1912)、大阪英語学校に行幸。</p> <p>■権中警部松山信吾、鹿児島から帰京。その足で権大警部・大山綱昌(1853~1934)を訪ね鹿児島状況口頭で報告する。</p> <p>□大山綱昌は、嘉永6年11月24日、薩摩国鹿児島郡鹿児島近在西田村で、薩摩藩士大山探賢の長男として生まれる。明治8年(1875)警視庁13等出仕となる。権大警部まで進む。明治10年(1877)陸軍中尉に任官し西南戦争に出征。明治11年12月28日から警視庁大警視川路利良の外遊時には二等警視補として随行。再び渡航して明治14年7月12日に帰国する。帰国後、9月29日に警視庁一等警視補から陸軍憲兵大尉に任じられて陸軍省に転出。次いで、農商務省に移り、権少書記官、書記官、参事官、工務局次長、商工局次長、権大書記官を歴任。</p> <p>明治29年(1896)8月12日、佐賀県知事に抜擢された。明治36年(1903)2月、山梨県知事に異動。明治38年(1905)9月11日、長野県知事、明治44年(1911)7月4日から大正2年(1913)6月1日まで、岡山県知事。大正3年(1914)4月7日、錦鶏間祇候。大正8年(1919)1月、貴族院議員に勅選され、交友倶楽部に属して活動し、昭和9年10月18日、死去するまで在任した。</p>	5553
	2月15日	<p>■「西南戦争、始まる」。西郷隆盛(1828~1877)が拳兵。西郷軍一番大隊と二番大隊が鹿児島旧練兵場より、50年ぶりという大雪の中、熊本に向けて鹿児島を出発する。一番大隊は西田橋から出、川内・出水経由の西目街道を、二番大隊は大口経由の東目街道を進む。</p> <p>□西郷や桐野の目論見では、西郷軍が熊本城(熊本鎮台)に殺到すれば鎮台は抵抗しないだろう。そこで鎮台の兵器、弾薬を分捕り、武備を増強した上で、九州中原に進軍し、更に広島を突き大阪を破り、海陸から東京へ進攻という夢のような計画であった。</p> <p>■県令大山綱良は、西郷軍の軍資と出兵を授ける。</p> <p>■西郷隆盛名の熊本鎮台司令長官谷干城宛の書状が送られる。「拙者儀今般政府尋問の廉有り……」。これは西郷のあずかり知らぬ書状という。</p> <p>■西郷軍六番・七番連合大隊は先鋒軍として加治木を進み、先頭は早くも横川着。</p> <p>□列府晋介(1847~1877)は、自分が区長の加治木で別に二大隊(六番・七番大隊)を組織してその指揮長になった。副官が仁礼新左衛門景通。</p> <p>六番大隊長は指揮越山休蔵(1846~?)、大隊監軍が袖木彦四郎、小隊長が鯨島敬輔、七番大隊長は指揮児玉強之助、一番小隊長が坂元敬介。</p> <p>■陸軍将校の親睦共済団体「偕行社」、設立。</p> <p>□陸軍将校の集会所・社交場(将校倶楽部)や一種の迎賓館として東京府九段に集会所(九段偕行社/東京偕行社)が設立された。</p>	5556
			5557



西郷隆盛



大山綱良



村田新八



永山弥一郎



西郷小兵衛(隆盛の末弟)



辺見十郎太



桐野利秋(中村半次郎)



篠原国幹



神瀬鹿三



宮崎八郎



小倉處平



佐々友房



池辺吉十郎



平川惟一



東鳳正



坂田諸潔



島津啓次郎



大島景保



有栖川宮熾仁



谷干城



黒木為楨



山県有朋



乃木希典



大山巖



川村純義



野津鎮雄



川路利良



山田頭義

西暦1877

明治10	2月16日	<p>■三番大隊と四番大隊が、出発する。 東目街道を進み加治木・人吉を経て熊本へ向かう。</p> <p>■横浜からの警部巡查700余名、神奈川丸で博多に着く。17日、長崎着。 熊本派遣部隊は、神奈川丸で熊本に向かう。</p> <p>■明治天皇、大阪より京都に再度還幸。 ■未明、神戸に着いた大久保利通は、伊藤博文、川村純義海軍大輔と面談。 伊藤と共に午前9時、京都に着す。直ちに三条実美太政大臣、木戸孝允内閣顧問と京都御所に会す。 □大久保は自ら鹿児島に往き、西郷隆盛と面接し大義を説かんことを請う。 木戸も鹿児島県の横車を怒り、自ら任にあたることを請う。刺し違えるかもと懸念の朝議、これを許さず。島津久光と西郷に勅使を派遣することに落ち着く。</p> <p>■大警視川路利良(1834~1879)、右大臣岩倉具視(1825~1883)に面謁、鹿児島で捕縛された部下の件もあり、自らの現地派遣を懇願。</p>	5558 5559 5560 5561
	2月17日	<p>■五番大隊と砲隊が、熊本に向かって出発。 西郷隆盛は、参謀格淵辺群平(1840~1877)を伴い、砲隊と行を共にした。 □西郷隆盛は朝、和服に袴姿で武屋敷を出て、私学校で陸軍大将の軍服に着替えたのち、大雪の中を東京に向け出発したという。 □西郷は、大山県令に語ったという。 「大久保とは家族同様にしてきたのだから、自分に疑いがあれば、上京しろと言ってくるか、自ら鹿児島に来るか、手紙でもよこすべきだ」と。 ■これを見送りに行った桂久武(1830~1877)は、貧弱な輜重への心配と西郷への友義から急遽従軍し、西郷軍の大小荷駄本部長(輜重隊の総責任者)となった。</p> <p>■熊本県権令敬明(よしあき)(元佐賀藩支藩小城藩士)(1822~1909)、内務卿大久保利通に「薩人兵器を持し県下に入る」と一報。</p> <p>■東京にいた小室信介(1852~1885)、神戸・京都を経てこの日に宮津に戻り、「天橋義塾」の社員と、西南戦争対応を協議する。</p> <p>■三条実美(1837~1891)は、大久保利通、木戸孝允、山県有朋、伊藤博文を集め善後策を協議。 ■太政大臣三条実美、大久保利通及び木戸孝允と共に参朝し、鹿児島出兵及び勅使差遣のことを決して親裁を仰ぐ。 天皇は、有栖川宮熾仁親王(1835~1895)を召し勅使を命ずる。</p>	5562 5563 5564 5565
	2月一	<p>■この月、西南戦争の開始と共に、京都御所に仮太政官が設置される。</p>	5566
	2月18日	<p>■アーネスト・サトウ(1843~1929)、鹿児島発(九州から脱出)。</p> <p>■熊本鎮台司令長官陸軍少将・谷干城は、熊本県権令富岡敬明に、西郷軍の進攻に備え諸隊を配置したことを伝える。 ■熊本鎮台、熊本市民に立ち退き令を発する。 ■熊本県庁に鹿児島県令大山綱良の書状が鹿児島からの専使により届く。 「今般西郷隆盛外人員上京二付」。19日には鎮台にも。</p> <p>■小倉への帰路に就いた第14連隊長心得・乃木希典(1849~1912)少佐、福岡まで戻ったところで熊本入城の命を受け、再び南下する。</p> <p>■明治天皇、京都梅津パピールファブリック(製紙工場)に行幸。</p> <p>■東京に、熊本鎮台よりもまた「西郷軍至れり」の電報が入る。</p>	5567 5568 5569 5570 5571

西暦1877

	2月19日	<p>■士族「佐土原隊」は、総裁島津啓次郎(旧佐土原藩主三男)(1856~1877)、参謀鮫島元(1834~1877)として約200名で結成し、この日、先陣が熊本に向けて佐土原(宮崎県宮崎市佐土原町)を出発。 佐土原隊中陣は、武器調達のため、都城を経て鹿児島に向かう。 □鮫島元は、軍用金が不足しているので、出兵に当って本藩である鹿児島島の島津久光・忠義父子に交渉したが断られ、佐土原に帰り「豪富ノ士族等ヨリ募金シ、金千円受取った。その後、佐土原区長所二到り米塩募り方ヲ命じ」、5月、桐野利秋より「日向国参軍」を申付けられた。</p> <p>■西郷隆盛、桐野利秋、人吉(熊本県人吉市)に到着。</p> <p>■熊本電信分局、鎮台内に臨時電信分局を設ける。 ■熊本城は、午前11時40分から午後3時まで原因不明の火出で大小天守などの建物を焼失する。同時に30日間を賄う米その他の食料、城下の民家約千軒が焼失。 ■熊本城に小倉第14連隊の一部、331名が到着する。</p> <p>■京都を行在所とする旨布告。</p> <p>■天皇、西京行在所二於て、「征討總督二品親王有栖川宮熾仁同参軍山県有朋川村純義へノ勅語」。 □早朝、鹿児島県逆徒征討総督に有栖川宮熾仁親王(1835~1895)、陸軍は山県有朋(山口)(1838~1922)陸軍中将、海軍は川村純義(鹿児島)(1836~1904)海軍大輔中将に征討参軍の勅語が出される。カリスマ的指導者である西郷隆盛に対抗して権威のある貴種を旗印として用いるためと、どちらか一方を総司令官にせず、同じ中将の2人を副官に据えることで、陸軍と海軍の勢力争いを回避した。</p> <p>■東京鎮台司令長官陸軍少将野津鎮雄(鹿児島)(1835~1880)を第1旅団司令長官、大阪鎮台司令長官陸軍少将三好重臣(山口)(1840~1900)を第2旅団司令長官に命じ、大阪に総督本営を置いて諸軍を部署する。 □動員されたのは、基幹となる歩兵でみると、第1旅団が東京鎮台の第1連隊第3大隊と大阪鎮台の第8連隊第2大隊、第2旅団が近衛第1連隊の第1・第2大隊と、それぞれ2大隊ずつにすぎなかった。</p> <p>■政府の兵員、弾薬、食糧の円滑な輸送のため助成を受けている三菱に対して社船の徴用が命じられる。 三菱は定期航路の運航を休止し、社船38隻を軍事輸送に注ぎ込む。</p> <p>■鹿児島県逆徒征討の流言、噂話らの新聞掲載が禁じられる。 ■西南戦争のため電信による私報を停止(~10月5日)。</p>	5572 5573 5574 5575 5576
	2月20日	<p>■熊本の少警視・綿貫吉直(元柳河藩士)(1831~1889)から電命を受けた福岡・佐賀派遣警視隊は、福岡県警の協力で警戒網を張り、鹿児島県専使12名を逮捕する。鹿児島県令大山綱良の書類等を押収し、東京の大警視川路利良と京都の内務卿大久保利通に送付する。 □これにより、西郷隆盛が西郷軍総帥として熊本に向かっていることが分かった。 福岡派遣警視隊指揮の権少警視・重信常憲(鹿児島)は、恩ある西郷に敵対できないと帰京を願い出、許される。</p>	5577

西暦1877

明治10	2月20日	<p>■日向飢肥土族・伊東直記(元飢肥藩家老)(1835~1903)、川崎新五郎ら400名余の「飢肥隊」、西郷軍に加わるために出発。19日とも。のち、小倉処平(1846~1877)が100名を率いて加わり、総帥となる。</p> <p>■西郷隆盛、桐野利秋、八代(熊本県八代市)に到着。</p> <p>■別府晋介(1847~1877)は、加治木・国分・帖佐・重富・山田・溝辺郷の兵を募って独立大隊(後に六番大隊・七番大隊)を組織し、その連合指揮長となって先発北上した。この日、この大隊が川尻(熊本市南区川尻)到着、ここで熊本鎮台兵候隊と遭遇戦をしたのが西南戦争の実戦の始まりである。</p> <p>□別府は大慈寺を本営とし、4月15日撤退時まで、川尻を兵站基地し野戦病院を置いた。</p>	5578
		<p>■少警視綿貫吉直以下の長崎派遣警視隊482名が、この日までに熊本城に入る。熊本鎮台の兵力は、3,515名となったという。</p> <p>■熊本民権党平川惟一・宮崎八郎(元熊本藩士)(1851~1877)ら40数名、夜、保田窪神社へ結集、熊本「協同隊」結成・挙兵。</p>	5579
		<p>■征討参軍山県有朋率いる第1旅団(野津鎮雄)・第2旅団(三好重臣)、博多へ向け神戸港を出港。</p>	5580
		<p>■大分県派遣の豊後口警視隊と長崎派遣警視隊が、東京を発つ。</p> <p>□豊後口警視隊には、元会津藩家老・佐川官兵衛警部が所属していたことでも知られる。</p>	5581
	2月21日	<p>■熊本電信分局は焼失、午後3時40分には、熊本鎮台内の臨時電信分局が外部と連絡していた電信線は西郷軍によって切断され、外部との連絡を絶たれた。</p> <p>□久留米電信分局が、それに代わる。政府軍は南下に伴って、2月23日には原町、24日には南関、3月9日には船熊、3月16日には木葉、3月29日には山鹿に電信分局を開設し、久留米からの電線を伸ばす。</p> <p>■桐野利秋、村田新八、川尻に本営を設置。熊本南方の川尻に集結したその数は、1万3千兵とされる。</p> <p>■熊本「協同隊」、出町学校集合、約400名となる。次いで、西郷軍と川尻で合流。</p> <p>■熊本に向かう「飢肥隊」、延岡で弾薬2万5,000発分が貸与される。</p>	5582
			5583
			5584



三好重臣

西暦1877

	2月22日	<p>■第1旅団(野津鎮雄)・第2旅団(三好重臣)、博多到着。</p> <p>■未明、篠原国幹、永山弥一郎、池上四郎ら、相次いで川尻に到着。本営軍議で桐野利秋・篠原らが主張する全軍攻城論と池上・野村忍介・西郷小兵衛らが主張する種々の分進論が折り合わず。しかし、早朝、鎮台に総攻撃に決定する。</p> <p>■「熊本城包囲」。西郷軍、早朝から熊本城を包囲して総攻撃。五番大隊は本荘村に布陣して、安己・明午・子飼の各橋を渡って進撃。四番大隊は花畑に進出、攻撃する。一番大隊と六番・七番連合軍は、西方から猛攻。</p> <p>■熊本城には、第6軍管鎮台本営がおかれ、歩兵第13連隊が配備されていたが、司令官谷干城少将は、とりあえず小倉分営の第14連隊(司令官乃木希典少佐)に対して本営に合することを命じると共に、籠城策をとって西郷軍を支えながら援軍を待つことに決した。しかし第14連隊のうち開戦までに熊本城に入城し得たのは半大隊にすぎなかった。</p> <p>■昼過ぎ、西郷隆盛が代継宮(熊本市北区龍田)に到着。</p> <p>■「向坂の戦い(植木の戦い)」。政府軍一部の植木進出を聞き、午後3時に西郷軍村田三介(1845~1877)・伊東直二(1840?~1908?)の小隊が植木に派遣され、夕刻、伊東隊の岩切正九郎が、乃木希典(1849~1912)率いる第14連隊の軍旗を分捕る。連隊旗手・河原林雄太(1848~1877)少尉が戦死したのだ。</p> <p>□『連隊の魂である軍旗を奪われた以上、天皇に申し訳なく……』、乃木少佐はこの後、幾度か自決を試みようとしたが、回りの兵士に止められ思い止まった。この軍旗事件は、明治天皇に殉死した乃木大将の遺書によって国民の前に明らかになった。現在、千本桜には乃木大佐記念碑が建っている。</p> <p>■旧藩校時習館の学校党首領・池辺吉十郎(1838~1877)、佐々友房(1854~1906)ら「熊本隊」(1,300名)、健軍神社へ結集し出陣式を挙げ、「禁関擁護」を名分として西郷に呼応して挙兵。</p> <p>□熊本隊は、士族最大党派学校党が中心で首領・池辺は、明治3年藩少参事を辞して私塾をひらき同4年鹿児島に遊学。明治10年でも、学校党の士族らは、攘夷、洋化反対、士族特権復活を唱えていた。</p> <p>■東京日日新聞社長の福地源一郎(1841~1906)が、軍団御用係の名目で西南戦争に従軍する。3月、慶應義塾在学中の郵便報知新聞の犬養毅(岡山県出身)(1855~1932)が、同じく従軍する。</p> <p>□犬養毅は、従軍ルポ「戦地直報」を掲載した。</p>	5585
			5586
			5587
			5588
	2月23日	<p>■「木葉の戦い」。乃木少佐は、早朝から西郷軍北上阻止のため、木葉山の東に戦線を構築。西郷軍は木葉山北まで進出し、乃木隊を攻撃。乃木少佐は乱戦の中で馬を撃たれて落馬、部下が身を挺して庇って難を逃れて敗走する。しかし、西郷軍は本営からの追撃中止指令に見舞われる。</p> <p>■「小倉電撃作戦」。</p> <p>南下政府軍邀撃に戦術を変えた西郷軍、池上四郎(1842~1877)が、小倉に向かうべく、村田三介(1845~1877)ら数箇小隊を率いて出発したが、続々と南下してきた政府軍と田原・高瀬・植木などで衝突し、分散させられ失敗する。</p>	5588

あとがき

この本は、王政復古から明治維新、そして西南戦争までの時代を切り取り、その軌跡を追ってみようと企画いたしました。薩摩藩年表帖中巻では、鹿児島藩を中心に記述されています。編集に当たって、鹿児島市観光交流局明治維新150年・西郷どん推進室様などから写真のご提供を受けました。詳細な年表を通して、明治維新時代を垣間見て頂けましたら幸いです。編集にあたり、別記参考図書や国立国会図書館デジタルコレクション、自治体・各団体WEB等、大いに活用させていただきました。

しかし、資料による違い、異説、物語などあらゆる事項があり、すべては、弊社の編集責で掲載しております。

仮称「明治150年…後編」及び「明治文明開化年表帖」は、近刊予定をしております。

最後になりましたが、ご協力いただきました取材先様、スタッフの皆さまに、厚く御礼申し上げます。

明治150年その歩みを知る、つなぐ(前編) 西郷どん、大久保卿、薩摩藩年表帖(中巻)

政治、施政、士族の乱、西南戦争、軍国、国際問題、事件などが時系列でわかる！

第1版第1刷

発行日 2018年6月15日

年表 ユニプラン編集部

編集 ユニプラン編集部(鈴木正貴 橋本豪)

デザイン 岩崎宏

発行人 橋本良郎

発行所 株式会社ユニプラン <http://www.uni-plan.co.jp>

(E-mail) info@uni-plan.co.jp

〒604-8127 京都市中京区堺町通蛸薬師下ル 谷堺町ビル1F

TEL(075)251-0125 FAX(075)251-0128

振替口座/01030-3-23387

印刷所 為國印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-89704-460-6 C0021